全校朝会講話 2020.10.19

皆さんおはようございます。

先週の木曜日に、3年生と4年生の授業でパラリンピックの選手にきてもらい、授業をしてもらいました。高田さんという夫婦の方です。旦那さんのゆうじさんは、耳が不自由でよく聞こえません。しかし、400mハードル走で日本の1位です。奥さんのちあきさんは、目が不自由で全く見えません。しかし、走り幅跳びで日本の1位です。そのお二人に教えていただいたのは、目にアイマスクをつけて、歩いたり走ったりして、目が見えないというのはどんな様子なのかを、実際にやってみました。もちろん一人では歩けませんからもう一人の人とロープを一緒に持ちながら、言葉をかけてもらいながら、行いました。みんな上手に歩いたり走ったりしていました。

終わったあとに、目の見えない千秋さんに4年生が、今まで一番困ったことは何ですか、という質問をすると、ちあきさんは、困ったことはありません、と答えていました。お二人の話からは、目が見えなかったり、耳が聞こえないことで不自由はあるけれども、不幸せではない、そう感じました。

次に、この写真を見てください。

これは、10月10日にの朝日新聞の夕刊に出ていた記事です。

新しくデザインされた洋服をみんなに紹介するファッションショーの様子が記事に書かれています。ちょっとその文章を読んでみます。

「華やかな衣装を身にまといランウェーを歩く（ランウェイというのはファッションモデルの人が歩く道のことです）」。「華やかな衣装を身にまといランウェーを歩く。多くのレンズが一斉に向けられる。8月、義足の女性がモデルになる「切断ヴィーナスショー」での一幕だ。

大学2年生の湯口英理菜さん（20）は生まれつきの（先天性の）病で3歳の時、両足のふとももから下を切ってしまった。小学生までは兄やその友だちと近所の公園でよく遊んだ。しかし中学になって制服になると、スカートからのぞく義足によその人がじろじろ見ることを強く感じるようになった。そして、外に出ることが少なくなってしまった。

気持ちが変わったのは中学3年生の時。義足の人が集まるスポーツクラブに誘われたことだった。自分と同じような人が走る姿に驚いた。高校では陸上部（運動部）に。「まさか自分から義足をさらけ出すとは」と振り返る。同時にモデルも始めた。今は日本体育大学でパラリンピック出

場を目指す。なんと、200メートル走の世界記録を持つアスリートだ。

　ファッションが好き。進路にあった美容師かスタイリストの夢は後にした。今は陸上をやり抜きたい。「ショーでは好きなスカートを堂々と着られます。今は練習着が多いので」。細める目は輝いていた。」このように、新聞には書かれていました。

　ちなみに、湯口えりなさんは、3年前の24時間テレビに高校生の時に出演したことがあります。

　皆さんはこの話を聞いてどう思いましたか。私は、どんな困っている時、どんな苦しい状況でも、心を強くもって進めば、できないことはないんだなと、感じました。皆さんも考えてみてください。

　これで、校長先生のお話を終わります。